

---

# 幻想チクタク

秋助

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

幻想チクタク

### 【コード】

N0460J

### 【作者名】

秋助

### 【あらすじ】

時計店にいる『私』。無口なおじいさんに伝えたいことがあります。…

(前書き)

小説というより言葉が好きです

「ねえ、お母さん」

「うん？」

「どうして同じ時計が二個もあるの？」

子供が指差した先には、今はもう動かない柱時計が十二時で止まっている。

「これはね、あなたが生まれた時間で止めた時計」

「じゃあ、もう一個は？」

「ん、それは」

\*

\*

カチリ、コチリ、秒針が進む。振り子が揺れる。

古い図書館に良く似た時計店の一室で、私と向かい合わせに祖父が座っている。

部屋一面にはあらゆる時計が置かれていた。水時計、砂時計、振り子時計、電波時計、ランプ時計、原子時計、親子時計、八ト時計。そこかしこで時間を刻む音が鳴り響く。

「ねえ、おじいさん」

「……………」

相変わらず、無口と無愛想の共同生活が長いおじいさんは生死の確認がしづらい。

「この部屋には嘔吐が多すぎる。正確な時刻が知りたくても、みんな勝手に時間を自己主張するんだもん。おかげで私は毎日遅刻だよ」

チクタクチクタク。

大きな古時計だけが百年の歴史を知っている。

おじいさんが生まれた時に、曾祖父からプレゼントされた時計ら

しい。私は昔から一定のリズムで揺れる振り子と、ポーン、ポーンと響く音が好きだった。

「聞いてても聞いてなくても良いけどさ、勝手に話すから」

もう、寝息も聞こえない。

「私ね、六月には式を挙げる予定だから、おじいさんにも出席して欲しいな」

……でも、知ってるよ。ゼンマイ式の時計はいつか止まるって。

もうすぐ時刻は二十四時を回る。

チツク。

タツク。

チクタクチクタク。

天国ってどっち？

こっち。

そっち？

あっち。

どっち？

天国ってこっち。

こっちってそっち？

そっちってあっち。

あっちってどっち？

どっちってこっち。

こっちはそっちであっちはどっち？

どっちはあっちでそっちはこっち。

ポーン、ポーン。

……………あ。

真夜中にベルがなった。

「……時計は汚いの、音色は綺麗なんだね」

止まった時計。動いた時計。私が産まれた日に買った時計。素敵な彼氏ができた日を刻んだ時計。私とおじいさんが一緒に過ごした日を告げる時計。正直者な時計。狂った時計。大きなのっぽの古時計。沢山の時計が身勝手に私の頭の中で雑音を掻き鳴らす。

「ねえ、おじいさん」

ポーン、と古時計が返事をした。

「もし、私に子供が産まれたら、柱時計を買おうと思うの。……どんなのが良いかな？ おじいさんのお店には時計が多すぎて分からないや……」

でも、とりあえず、おじいさんの大切な古時計と同じ型を買おう。懐かしい匂い。木漏れ日の匂い。おじいさんの匂い。

「ありがとね……おじいさん」

ポーン、と、

遠くの方で合図を聞いた。

(後書き)

以前書いた小説を載せるだけではなく、そろそろ新しい小説も載せたいなー。とりあえずストックがなくなるまでは以前書いた小説で

……

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0460j/>

---

幻想チクタク

2010年11月14日11時02分発行